

よこすか豊かな学びづくり推進プラン

令和8年度（2026年度）～ 令和11年度（2029年度）



横須賀市教育委員会

横須賀市が目指す「学力向上」と「豊かな学び」

策定の趣旨と「豊かな学び」づくりのための方向性等について

令和4年度に策定した「横須賀市学力向上推進プラン」(以下、「前プラン」という。)で掲げた目標の達成状況について、特に成果が顕著だった9つの小中学校の取り組み状況を調査した結果、学級経営や授業づくりに関して4つの共通点がありました。

「日常的に自由に話し合える風土」 「安心して学ぶことができる教師とのかかわり」

「子どもが学びの必然性を感じる動機付け」 「学びの自覚や実感を伴った振り返り」

これらの学校では、学習活動において、グループワークや話し合い活動が目的や状況に応じて取り入れられ、自分の考えを深める学び合いの場が設定されていました。その根本には、「児童生徒を大切にすること」や「児童生徒の学んでいる姿をイメージして学校研究を推進すること」などがあり、授業



後には児童生徒の具体的な姿や発言を教師同士が共有し、どのような資質・能力が育成されているのかを分析する取り組みも進められていました。

一方、前プランに基づいた取り組みにおける課題は、全国学力・学習状況調査(以下、「全国調査」という。)や横須賀市立小・中学校学習状況調査(以下、「市調査」という。)の結果が十分に授業改善に結び付けられていないことや、「学力」という言葉が「ペーパーテストなどの点数」といった“教科内容に即して形成される認知的な能力”という狭い意味で捉えられてきたことなどです。

そこで新たなプランでは、「学力」を「資質・能力」ベースの考え方に基づき「児童生徒一人一人がよりよく生きていくために必要な力」として総合的に捉え直しました。また、横須賀が目指す教育の姿「あなたが好き 私が好き 横須賀が好き と誇れる人づくり」の実現を目指して、児童生徒が将来の予測困難な社会をたくましく生き抜き、持続可能な社会の担い手として成長できるよう努めることとしています。そして、「児童生徒の学びをより豊かにする」という本プランの理念をわかりやすく伝えるため、「よこすか豊かな学びづくり推進プラン」を通称として用いています。

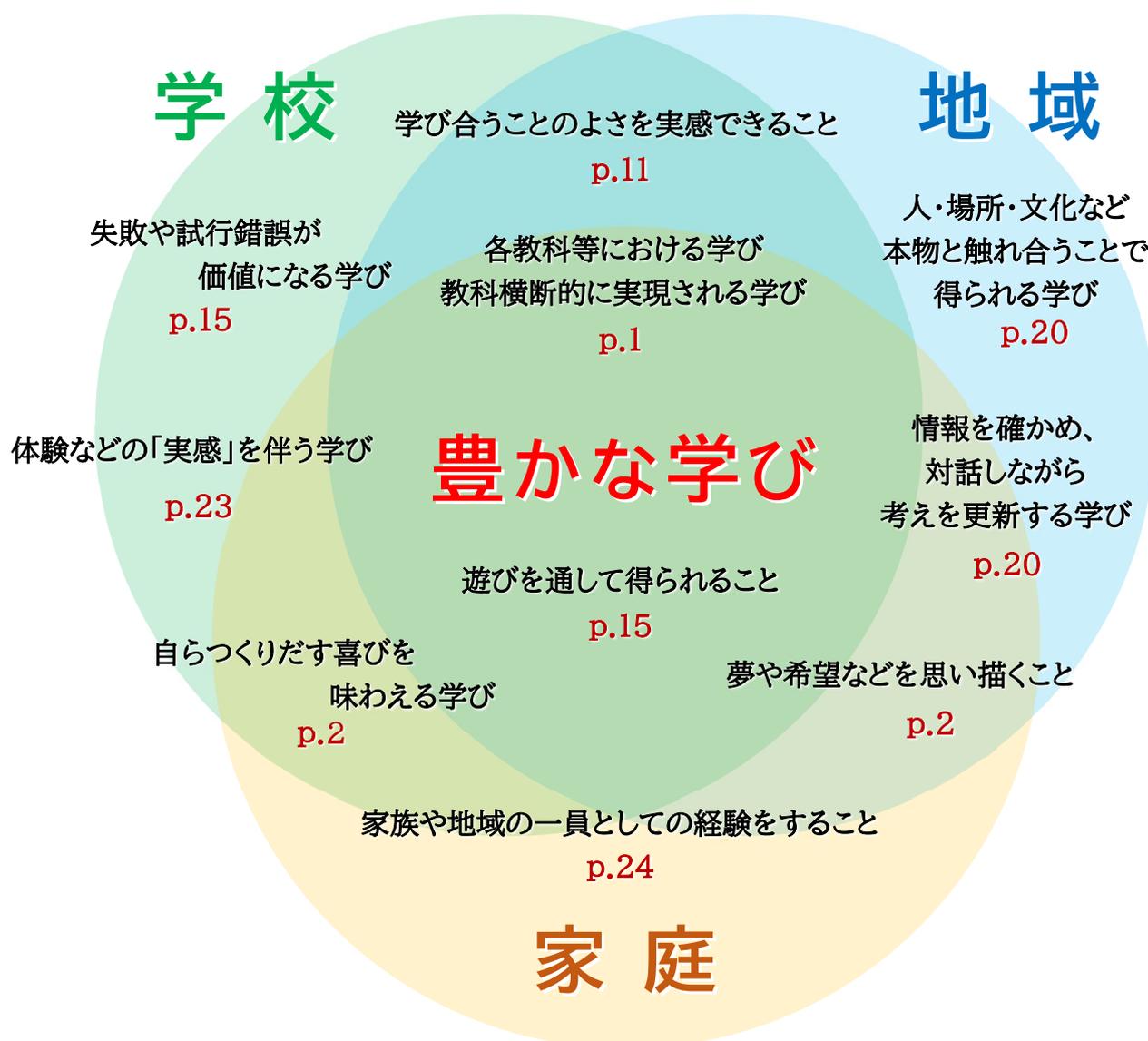
本市が目指す「豊かな学び」とは、各教科等における学習活動を充実させることによって認知的な能力(※)の育成を目指すことはもちろん、仲間と学び合うよさを実感することや、失敗しても挑戦し続ける力(レジリエンス)、共感しようとする力、物事に没頭する力などの非認知的な能力(※)の育成にも着目した学びです。

さらに、成長を見守る大人たちが、校種等を超えた学びのつながりを意識することも大切です。児童生徒が安心して豊かに学び続けられるよう、各成長段階での姿を具体的にイメージし、発達段階や特性を踏まえた支援につなげるために、学校だけではなく、家庭や地域が一体となって取り組みます。そして、児童生徒が自ら一歩踏み出し、学ぶことの楽しさや、つくりだす喜びを実感できる新たな学びの在り方を探究しながら、夢や願いをもって未来に羽ばたくことのできる教育を目指します。

なお、全国調査等で得られる教科調査の結果については今後も引き続き着目し、認知的な能力と非認知的な能力の両面を一体的に捉え、児童生徒の資質・能力の育成状況等を多角的・多面的に分析しながら取り組みます。

※「認知的な能力」と「非認知的な能力」については、15ページの「コラム」をご覧ください。

【豊かな学びのイメージ図】



目次

第 1 章 よこすか豊かな学びづくり推進プランの基本方針	4
第 2 章 よこすか豊かな学びづくり推進プランの目標および指標	8
目標 1 共に学び合う集団をつくる	11
(1) 「共に学び合う集団」について	
(2) 「共に学び合う集団」をつくるためには	
(3) 達成状況の分析について	
目標 2 粘り強く学ぶ力を育てる	15
(1) 「粘り強く学ぶ力」について	
(2) 「粘り強く学ぶ力」を育てるためには	
(3) 達成状況の分析について	
目標 3 社会とつながる力を育てる	19
(1) 「社会とつながる力」について	
(2) 「社会とつながる力」を育てるためには	
(3) 達成状況の分析について	
目標 4 生活や学びの土台となる力を育てる	23
(1) 「生活や学びの土台となる力」について	
(2) 「生活や学びの土台となる力」を育てるためには	
(3) 達成状況の分析について	
第 3 章 よこすか豊かな学びづくり推進プランと主な関連事業等	28

※ 本プランでは、教育現場や行政の取り組みを説明する際には「児童生徒」という言葉を、子どもたちの日常や地域での姿、保護者の皆様との連携について触れる際には「子ども」という言葉を用いています。

これは、制度としての教育と、温かい地域社会の中での成長、その両面を大切にしたいという意図によるものです。

第1章

よこすか豊かな学びづくり推進プランの基本方針



本プランは、令和7年度横須賀市学力向上推進委員会
において示された「答申」に基づき策定しました。

なお、本プランの期間は、令和8年度から令和11年
度です。

【本プランの位置付け】

横須賀市基本構想・基本計画

「YOKOSUKA ビジョン 2030」

横須賀市教育振興基本計画

<横須賀の目指す教育の姿>

あなたが好き 私が好き 横須賀が好き

と誇れる人づくり

横 須 賀 市 学 力 向 上 推 進 プ ラ ン

(よこすか豊かな学びづくり推進プラン)

令 和 8 年 度 ~ 令 和 1 1 年 度

- 目標1 共に学び合う集団をつくる
- 目標2 粘り強く学ぶ力を育てる
- 目標3 社会とつながる力を育てる
- 目標4 生活や学びの土台となる力を育てる

予測困難な時代である今日においては、児童生徒が生成A I など多様な情報技術が融合する現代のデジタル化社会を生きる姿もイメージする必要があります。

また、児童生徒一人一人の力を伸ばし、横須賀市が目指す教育の姿を実現するためには、学校・家庭・地域が三位一体となって取り組み、豊かな学びをつくることが大切です。

その際、それぞれが重視して取り組むべきこととして、次のようなことが考えられます。

【学校・家庭・地域が三位一体となって「豊かな学び」をつくるイメージ図】



学校・家庭・地域が三位一体となって取り組み、豊かな学びをつくるためのキーワードを「つなげる・つながる」とし、横須賀市教育委員会がその全体をサポートします。

第2章

よこすか豊かな学びづくり推進プランの目標および指標



本プランでは、横須賀が目指す教育の姿「**あなたが好き 私が好き 横須賀が好き** と誇れる人づくり」の実現を目指し、児童生徒一人一人がよりよく生きていくために必要な力を資質・能力の視点に立って捉え直し、「4つの目標」として掲げました。この「4つの目標」の達成を目指すことで児童生徒の「豊かな学び」につなげていきます。

本プランの「4つの目標」は、次のとおりです。

目標 1 共に学び合う集団をつくる

目標 2 粘り強く学ぶ力を育てる

目標 3 社会とつながる力を育てる

目標 4 生活や学びの土台となる力を育てる

「目標1」および「目標2」については、前プランで掲げていたものを踏襲し、これまでの成果や課題を踏まえてさらに取り組みを進めます。「目標1」は、授業をはじめ学校生活の中で、児童生徒が他者と共に学ぶことのよさを実感できる集団づくりを目指すものです。また、「目標2」は、児童生徒一人一人が学ぶ中で、すぐに答えを求めるのではなく、考え方や学び方を変えたり、試行錯誤を繰り返したりしながら、最後まで課題に向き合う粘り強さの育成を目指すものです。

「目標3」および「目標4」については、本プランで新たに設定したものです。「目標3」は、学校での学びが実生活や地域の活動などにもつながり、学んだことが日常や社会で役立つという実感に結び付けていくことを示しています。児童生徒の資質・能力は学校だけで育てられるものではありません。昨今発展が著しいさまざまな情報技術を適切に活用しながらも、地域の人や文化に直接ふれる体験の場をつくるなど、学校と地域が連携し、児童生徒が実感を伴って学べるようにしていくことを目指します。

「目標4」は、子どもがさまざまな体験を通して実感を積み重ねることの価値を、それを支える大人（学校・家庭・地域）が理解し、子どもが豊かに学び、生活できるようにしていくことを示しています。特に重要なのは、大人の子どもの関わり方です。子どもが学校でも家庭でも地域でも安心して過ごせるように、「子どもの成長を支え合う」という考え方を共有し、具体的な実践を通して三者がつながることを目指します。

また、この「4つの目標」の到達度を測り、適切に進捗管理を行うために、全市的な質問調査（横須賀市児童生徒学習状況等質問調査（以下、「市質問調査」という。))を行い、児童生徒の学びに対する意識や学級の人間関係、社会とのつながり、生活習慣に関することなどを把握します。調査対象は、小学校2～5年生、中学校1～2年生です。そして、全国調査における教科調査の結果と合わせて、目標ごとに多角的・多面的に分析します。複数のデータを総合的に捉え、認知的な能力と非認知的な能力のバランスのよい育成を目指します。

なお、全国調査における教科調査の結果については、これまでどおり全国の平均正答率を100とした場合の本市平均正答率を数値化して比較し、小・中学校の各段階における学習状況を捉えます。これは、児童生徒が学習した内容を「どこまで理解できているか」「どこでつまづきやすいか」などを具体的に分析するための大切な資料となります。国が行う全国調査結果の分析は年々精緻化しており、正答率だけでなく、知識および技能、思考力、判断力、表現力等の傾向、領域ごとの定着状況などを多面的に把握することができます。実際に、全国調査の結果は指導の工夫・改善につなげやすい形で示され、各学校での活用性も高まっています。

このような状況を受け、令和8年度以降は、これまで行ってきた市独自の教科調査は実施せず、全国調査の結果を基に児童生徒の実態を把握し、そこから見えてくる成果と課題を踏まえて、本市の豊かな学びづくりにつなげていきます。



0

全国調査のデータを有効に利活用するために… (令和6年度の横須賀市教育研究所長期研究の調査より)

令和7年度の学力向上担当者会では、令和6年度の横須賀市教育研究所長期研究員による「全国学力・学習状況調査データの利活用に関する研究」の研究成果について、報告がありました。実際に“分析ワークショップ”を行った幾つかの学校から「全教員で全国学調の全問題を解いてから、解答類型を基に児童生徒の思考を具体的にイメージすることで、学校組織としてはもちろん、教師自身の意識の変容があった」という報告もありました。

(令和7年度「学校教育だより」11月号 再編)



令和7年度学力向上担当者会
(10月15日)の様子

目標 1

共に学び合う集団をつくる

(1)「共に学び合う集団」について

「共に学び合う集団」とは、多様な他者を価値のある存在として尊重し、仲間と協働してさまざまな課題を解決していく集団であり、共に学び合うことを通して、自分のよさや可能性を認識して個性を伸ばすことができる集団です。教師は児童生徒が他者と共に学ぶことの意義を実感できるようにすることを重視し、児童生徒が主体的・対話的に授業に臨むという視点を持ちながら授業をつくることで、児童生徒の学びに向かう意識を高めま

す。
コロナ禍を経て、多くの児童生徒や教師、そして保護者が「友人と意見を交わすこと」や「顔を合わせて学び合うこと」などといった、学校で学ぶことの価値を再認識しました。また、一人一人が安心して意見を述べられること、分からないことを分からないと言えることなど、心理的安全性が保たれた環境は「豊かな学び」の大前提であるとも言えます。

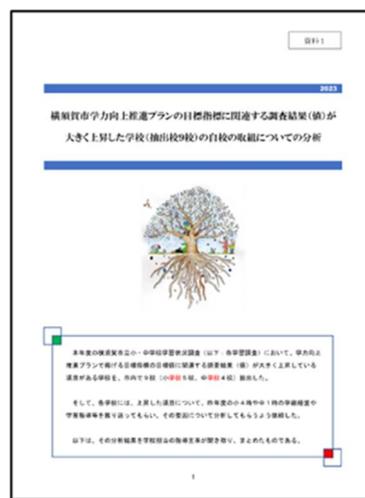


1

目標指標に関連する調査結果(値)が大きく上昇した学校(抽出校9校)の共通点とは…(2023の調査より)

冒頭で述べたとおり、前プランで掲げた目標に対し、成果が顕著だった9つの小中学校から聞き取った結果、学級経営や授業づくりに関する4つの共通点がありました。このことについて右のリーフレットにまとめ、令和5年度の学力向上担当者会で、共有しました。このリーフレットには指導改善等に関する様々なヒントがあります。

是非、ご覧ください。



(2)「共に学び合う集団」をつくるためには

① 必然性のある動機付けから学びを自分のこととして捉えられる授業を計画する

児童生徒が主体的・対話的に学びを深めていくためには、必然性のある動機付けがポイントになります。学びを自分のこととして捉えられるように、単元（題材）ごとに導入から終末までの指導計画を立てることが大切です。

また、自分たちで課題を設定し、仲間と解決しようとするような探究的で協働的な単元（題材）計画を立てることも大切です。児童生徒は、このような学習経験を通して新しい考え方や他者と関わることのよさに気付きます。自ら学びを深めることができた、という手応えを実感させ、それを積み重ねることで次の学びへの意欲を引き出します。

児童生徒に学ぶことの楽しさを感じさせ、その価値などを自覚させることで、知識および技能の習得、思考力、判断力、表現力等の育成につながるようにしていきましょう。

② 安心して学ぶことができる学級や学習環境をつくる

児童生徒の学習意欲を高めるには、誰かが発した疑問や意見について真剣に考えたり、共感したりするような集団づくりが大切です。そのために、まずは教師が率先して相手の思いを肯定的に受け止めるモデルとなるなどして、互いに認め合い日常的に自由に話し合える風土をつくることが不可欠です。また、グループワークや話し合い活動の際には、何のための話し合いかが分からなくならないよう、活動のねらいに即して支援し、他の児童生徒と意見交換したり、協議したりできるようにすることが大切です。そして、「仲間と一緒にだからこそ学びが深まる」「クラスみんなで考えると、一人では気付かなかったことに気付くことができる」と感じられるような集団を育成していきましょう。

(3) 達成状況の分析について

「共に学び合う集団をつくる」の達成状況については、成果指標（アウトカム）と活動指標（アウトプット）の2つの指標から分析します。

【成果指標（市質問調査による分析）】

児童生徒が、授業や学校生活において安心して自分の意見を言えたり、思いを受け止めてもらえたりしているという実感があるかを、市質問調査における次の設問の肯定回答率によって測ります。

調査対象は小学校2～5年生と中学校1～2年生です。本市全体の達成状況を分析する際には、小学校5年生と中学校1年生の結果を用います。

授業や学校生活では、友達や周りの人の考えを大切に、お互いに協力しながら課題の解決に取り組んでいますか。

また、基準値は、令和7年度の市調査において、小学校5年生と中学校2年生に行った同様の質問「みんなで課題を解決する場面で協力しようとしているか」の肯定回答率とし、毎年基準値を上回ることを目標値としています。

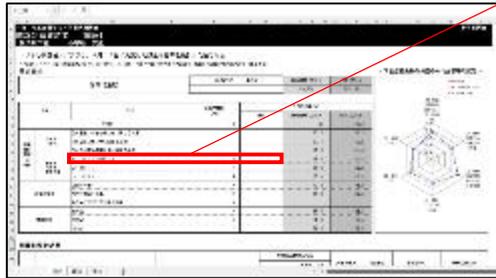
	基準値	目標値
小学校5年生	質問の肯定回答率 86.8%	毎年基準値を上回る
中学校2年生	質問の肯定回答率 89.9%	毎年基準値を上回る

各校においては、同一集団の経年変化に注目したり、同様の質問を年度末に行って意識の変容を独自で調査したりするなど、共に学び合う集団づくりが進んでいるか、継続的に調査分析を行います。

【活動指標（全国調査による分析）】

共に学び合う集団をつくることに関して分析するために、全国調査における国語科の「A 話すこと・聞くこと」の問題の正答率（02問題別調査結果）に着目します。

分類		区分
全体		
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に關する事項
		(2) 情報の扱い方に關する事項
		(3) 我が国の言語文化に關する事項
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと
B 書くこと		
C 読むこと		
		知識・技能



▲ 小学校国語



▲ 中学校国語

この結果は、単に「発表ができる」などということではなく、目的に応じて相手の話を正確に捉え、自分の考えについても根拠をもって伝え、対話を通して考えを深めていく力を表しています。「共に学び合う集団」では、児童生徒同士が考えを出し合い、違いを比べるなどして納得できる形にまとめるという過程が日常的に繰り返されますが、例えば「要点の取り違い」「条件の読み落とし」「根拠が弱い説明」「相手の意見を受けた発言の不足」といった課題等について、この結果から考察することができます。これはそのまま、学級の話合い活動の状況について振り返るきっかけにもなるため、市質問調査の結果と併せて見ることで、「話すこと・聞くこと」に関する力不足なのか「安心して発言できる関係性の弱さ」なのかを見立てやすくなります。

取り組み 1	各学校は、全国調査における国語科「A 話すこと・聞くこと」の問題の正答率について、本年度の結果と前年度の結果を比較することで児童生徒の学習状況を分析する。
取り組み 2	学校全体で具体的な指導改善のための手立てを講じる。

目標 2 粘り強く学ぶ力を育てる

(1) 「粘り強く学ぶ力」について

授業において、指示や説明だけで展開することや、正解にたどり着いたかどうかという視点だけで児童生徒を評価することは、「粘り強く学ぶ力」の向上にはつながりません。この力を育てる上で大切なのは、意図的に児童生徒がチャレンジできるように単元（題材）などの計画を立て、その環境をつくることです。そして、児童生徒が分からないことや難しい課題に出会ったときに、「もう少し考えてみよう」「別のやり方を試してみよう」と試行錯誤を続けられるよう、教師が適切に寄り添います。その際に、児童生徒がこれまでに習得した知識および技能、身に付けてきた思考力、判断力、表現力等を自ら組み合わせて活用し、「少し難しいけれど、自分の力で解決したい」と感じられるような課題を設定し、それに向き合えるよう支援することが大切です。一つの答えに急いでたどり着かせようとするのではなく、最適解を探ろうとチャレンジする過程を、授業の中心に据えることがポイントです。



2

認知的な能力 ・ 非認知的な能力 そのヒントは「幼児期に大切な学び」にある？

本プランで示している「認知的な能力」とは、知識や技能等、数値化されやすい能力です。一方「非認知的な能力」とは、数値化が難しい内面的な意欲や態度など、学びを支える土台となる能力です。近年、特に「非認知的な能力」が注目されています。

文部科学省のHPには「幼児期に大切な学びが分かる動画シリーズ」が掲載されています。内容は「幼児期」に限ったことではなく、非認知的な能力を育成するために小中学校段階でも大切にしたいことを感じ取れるものです。是非ご視聴ください。



右の二次元コードからは、HP 中の
“遊びは学び”ってどういうこと？”を
視聴できます。



◀ https://www.mext.go.jp/content/20250509-mxt_youji-000035147_7.pdf

(2)「粘り強く学ぶ力」を育てるためには

① 難しい課題に対しても工夫して解決しようとする経験ができるような単元や題材などの指導と評価の計画を検討する

「難しい課題」とは、児童生徒の能力や可能性を今より一歩高めるような、挑戦的な課題です。粘り強く学ぶ力を育てるためには、このような課題に対してもあきらめずに工夫して解決しようとする経験を積めるよう、指導計画を検討することが重要です。

探究的な学習活動や協働的な体験活動を通じて、児童生徒自身が、それまでの学びを振り返り、次の活動への見通しを立てたり、よりよいものを目指して試行錯誤したりするような、学びを調整する場面を含む単元（題材）などの指導と評価の計画が必要です。学びの過程における教師の評価（授業内での言葉かけや見守り、振り返りへのコメント等）や、「がんばることで解決することができた」という実感を伴った体験は、学習意欲の向上にもつながります。

② 学習評価の在り方を見直す

児童生徒の「粘り強く学ぶ力」を育てるためには、学習評価の在り方を見直すことも重要です。学習の過程でつまづきながらも考え方を工夫したり、別の方法を試したりする「試行錯誤の姿」に焦点を当て、その姿を励ますことは、児童生徒の学びを支えます。教師は、正しい答えや表面的な出来栄だけでなく、「どのように考えたのか」「どのような工夫をしたのか」など、学習の過程を具体的に受け止めたり、共感したりします。そして、学習の節目には児童生徒自身の言葉で振り返ることができるように指導します。また、目標を小さなステップに分けて示したり、時間をかけて取り組めるようにしたりすることで、児童生徒が「自分はここまでできるようになった」という学びの自覚や実感を持てるよう支援します。

こうした授業づくりと学習評価を通して、「時間はかかっても、最後までやり抜くことができる」という自信や学習意欲を育てることが、変化の激しい社会の中でも、自ら学び続けるような「粘り強く学ぶ力」を育むことにつながります。

(3) 達成状況の分析について

「粘り強く学ぶ力を育てる」の達成状況については、成果指標（アウトカム）から分析します。

【成果指標（市質問調査による分析）】

児童生徒に、簡単にあきらめずに努力し続けたり、失敗をしてももう一度挑戦したり、自分なりに工夫したりしながら粘り強く学んでいく力が身に付いているかを市質問調査における次の設問によって測ります。

調査対象は小学校2～5年生と中学校1～2年生です。本市全体の達成状況を分析する際には、小学校5年生と中学校1年生の結果を用います。

分からないことやわしく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか。

また、基準値は、令和7年度の市調査において、小学校5年生と中学校2年生に行った同様の質問「難しい課題にも挑戦して取り組もうとしているか」の肯定回答率とし、毎年基準値を上回ることを目標値としています。

	基準値	目標値
小学校5年生	質問の肯定回答率 82.0%	毎年基準値を上回る
中学校2年生	質問の肯定回答率 79.8%	毎年基準値を上回る

各校においては、同一集団の経年変化に注目したり、同様の質問を年度末に行って意識の変容を独自で調査したりするなど、粘り強く学ぶ力が育成できているか、継続的に調査分析を行います。

児童生徒が粘り強く取り組むことの価値についても児童生徒だけでなく、家庭に積極的に伝えましょう。また、学校で努力している様子を家庭に伝えたり、家庭での様子を聞いたりする中で、児童生徒に関する情報を共有することも大切です。そして、家庭においてもペーパーテストなどの点数や表面的な出来栄だけで評価せず、その子なりに工夫していることを聞いてみたり、失敗や遠回りも成長の一部として受け止めたりする関わりが大切であることも、学校と家庭で共有していきましょう。

なお、この目標の達成状況については、これまでは教科調査における記述式問題の無回答率から分析してきました。記述式の問題を解くためには、途中で考えが行き詰まったり、答えが一つに定まらなかったりしやすい分、「最後まで取り組む」「やり方を変えて試す」「見直して修正する」などの力が発揮されやすいと考えたからです。しかし、無回答にはさまざまな要因があることが明らかになり、児童生徒の「粘り強く学ぶ力」を分析するには、教科調査の結果のみでは十分ではないという結論に至りました。

今後は、見直しと試行錯誤を必要とする課題に取り組む場面において、「1回でできなくても、手順を変えれば前に進むことができる」「根拠を確認し直せば、説得力を増すことができる」といった経験を積ませると同時に、課題に取り組む姿や、振り返りの記述内容などから、粘り強く学ぶ力の育成状況を見取ることとします。

目標 3 社会とつながる力を育てる

(1) 「社会とつながる力」について

ここで言う「社会」は、今後児童生徒が生きていく未来の社会も含んでいます。また、ここで改めて確認したいことは、児童生徒の学びは学校の中だけで完結するものではなく、普段の生活や地域の活動などにもつながり、日常や社会で役に立つという実感に結び付くことが大切だということです。とりわけ、生成AIを含む情報技術の進展が著しく、多様な情報があふれる現代において、情報の信頼性を見極め、それを適切に活用し、自分の考えを整理して発信する力を育むことや、地域の人や場所、文化等とふれあいながら学ぶことが重要です。実体験を通して課題を見だし、その解決に向けて主体的に取り組む学びは、社会におけるさまざまな場面で活用できる概念的な知識の獲得につながります。

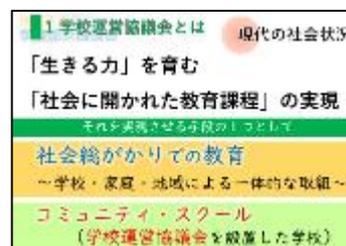
そして、「社会とつながる力」は学校・家庭・地域が連携して育んでいくことが不可欠です。地域資源等を活用し、その地域ならではの学びを目指します。

3 学校が、地域の中の学校であり続けること

～地域と共に創る学校 地域に愛される学校 地域を愛する子どもを育む学校～

本市では令和4年度からすべての市立学校に学校運営協議会を設置しています。タイトルは、本市学校運営協議会全体のスローガンです。

これまで、各学校運営協議会から、地域の実態に合った様々な取り組みが生まれています。各校の教育課程を地域の方をはじめとした委員の皆さんとともに熟議し、社会総がかりでその地域における「豊かな学び」をつくりだしていきましょう。



▲ 第一回学校運営協議会情報交換会（令和4年12月21日開催：ヴェルクよこすか会場）の際に用いたスライドの一部。

(2)「社会とつながる力」を育てるためには

① 地域で「人・場所・文化」などと実際にふれあいながら学ぶことができる教育活動を設定する

デジタル情報があふれる今日、実感を伴った体験や学びを自覚することがますます重要になっています。地域と連携して学習活動を進めていくことは、デジタル情報だけでは得られない、「人・場所・文化」などとの出会いにつながります。

地域には、「児童生徒が実社会と関わる場」をつくる大変重要な役割があり、地域で実際に学ぶことを通して、体全体を使って得られる実感を意図的、計画的に学習活動に取り入れることが、児童生徒の学びを豊かにします。例えば、地域の方に案内してもらい、地域の歴史や文化などに触れること、地域の商店街や企業、公共施設などに見学や体験活動を受け入れていただくことなどがそれに当たります。このような学習活動において大切なのは、「学校だけ」「地域だけ」で学びを完結させないことです。また、各学校で設置している学校運営協議会を活用して情報を収集したり、近隣の幼児教育施設と連携したりするなど、地域との協働によってさまざまなつながりを学びに取り入れていくことも必要です。その地域ならではの豊かな学びをつくりあげることを目指します。

② 日常生活と多様な情報とのつながりを意識した指導計画を立てる

学んだことが「社会でどう役に立つか」「日常生活とどうつながるか」について、児童生徒が実感できるようにすることや、学んだことを丁寧に振り返ることは、児童生徒の資質・能力の育成につながります。例えば、総合的な学習の時間で地域の課題をテーマとし、調べたことをまとめて発表することや、理科で実際の生活に結び付けて観察や実験をすることなどがそれに当たります。

また、多様な情報技術を活用して新たな表現を目指したり、インターネットを用いた調べ学習をする中で、整理したものをまとめて発信したりする学習活動も有効です。その際、情報の信頼性や、生成AIなどを活用する時に注意すべきことなどに触れ、デジタル・シティズンシップ（デジタル化社会に責任をもって参加できる力）を育むことも不可欠です。

(3) 達成状況の分析について

「社会とつながる力を育てる」の達成状況については、成果指標（アウトカム）と活動指標（アウトプット）の2つの指標から分析します。

【成果指標（市質問調査による分析）】

児童生徒が情報の信頼性や必要性を見極め、自分の考えを分かりやすく発信する力と、その情報を実際に社会とつなげる力を身に付けているかについては、市質問調査における次の設問によって測ります。

調査対象は小学校2～5年生と中学校1～2年生です。本市全体の達成状況を分析する際には、小学校5年生と中学校1年生の結果を用います。

自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。

また、基準値は、令和7年度の全国調査において、小学校6年生と中学校3年生に対する同様の質問「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」の肯定回答率とし、毎年基準値を上回ることを目標値としています。

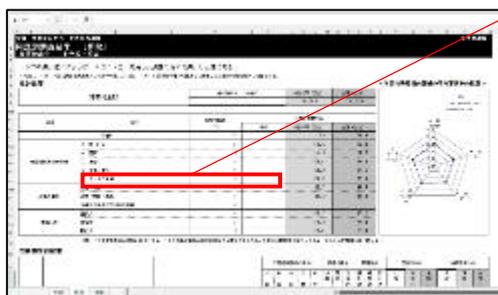
	基準値	目標値
小学校5年生	質問の肯定回答率 80.9%	毎年基準値を上回る
中学校2年生	質問の肯定回答率 89.2%	毎年基準値を上回る

各校においては、同一集団の経年変化に注目したり、同様の質問を年度末に行って意識の変容を独自で調査したりするなど、社会とつながる力が育成できているかどうか、継続的に調査分析を行います。

【活動指標（全国調査による分析）】

現代の社会では、報道機関のニュースに加え、SNS等で飛び交うものや生成AIの出力など、情報が一層多様化しています。こうした情報を鵜呑みにせず、条件や母集団、比較の方法、見落とされやすい偏り等を踏まえて吟味する力は、これからの社会を生きる上で欠かせません。児童生徒が情報に触れた際に、「読み取れる事実」と「推測されること」を混同していないか等の観点から学習状況を把握することが必要です。そこで本プランでは、児童生徒の社会とつながる力を情報の取扱いなどの視点から分析するために、全国調査における算数・数学科の「D データの活用」の問題の正答率（02問題別調査結果）に着目します。

分類	区分
全体	
学習指導要領の領域	A 数と計算
	B 図形
	C 測定
	C 変化と関係
	D データの活用
経路の観点	知識・技能 思考・判断・表現



▲ 小学校算数



▲ 中学校数学

併せて質問調査の結果も参照し、「データの活用」領域の理解に課題があるか、各教科等の学習において実社会や身近な課題とデータを関連付け、整理して発信する力に課題があるかを点検します。

取り組み 1	各学校は、全国調査における算数・数学科における「D データの活用」の問題の正答率について、本年度の結果と前年度の結果を比較することで児童生徒の学習状況を分析する。
取り組み 2	学校全体で具体的な指導改善のための手立てを講じる。

目標 4 生活や学びの土台となる力を育てる

(1) 「生活や学びの土台となる力」について

「生活や学びの土台となる力」を育てる上で大切なのは、子どもの言葉をまず受け止めること、気持ちに寄り添って共感の言葉をかけることなど、子どもを励まし支える関わりです。このような日々のコミュニケーションが、子どもの自尊心を高め、生活や学びの土台を形づくっていきます。

また、子どもがどこにいても安心して健やかに過ごせるように、「成長を支え合う」という考え方を大人同士が共有し、学校・家庭・地域が協力し合う姿勢が欠かせません。こうしたつながりがあってこそ、子どもの学びがより豊かで意味のあるものになります。

子どもがさまざまな体験を通して、「実感を伴って豊かに経験すること」の大切さを感じられるようにするために、子どもを取り巻く大人がその価値を理解し、子どもが豊かに学び、いきいきと生活できることを目指していきましょう。



4

家庭学習などにおける 子どもとの関わり方 について ～小学校保護者向けの家庭学習啓発リーフレット～



横須賀市教育委員会は、学校と家庭との学びをつなげることを目指し、小学校就学前の保護者および市立小学校の保護者に向けてそれぞれ、家庭学習啓発に関するリーフレットを配付（配信）しています。



それぞれのリーフレットは、各保護者に向けてのメッセージを記載していますが、学校や地域でもこのリーフレットを基に子どもの学びや、子どもとの関わり方について、ご検討いただきたいと考えています。具体的な内容についてはそれぞれの二次元コードから確認できますので、是非ご覧ください。



(2)「生活や学びの土台となる力」を育てるためには

① 学校・家庭・地域が思いを共有する

学校・家庭・地域がつながって、「この地域ではこんな体験ができる」「こんな子どもに育ってほしい」という思いを共有することは、子どもの学びを豊かにするために重要なことです。例えば、学校に外部講師を招く際には、学習のねらいを共有して活動計画を立てることや、家庭に向けて子どもの情報を発信する際には、活動のねらいや成長の過程を具体的に伝えるなどのことがそれに当たります。

また、子どもが「実際にやってみる」ことで学びを深められるように、さまざまな体験の場を学校・家庭・地域と連携してつくり、子どもの言葉や行動を肯定的に受け止めながら、子どものよさや可能性を見つめ「生活や学びの土台となる力」を三位一体で育てていきましょう。

② 家庭と学校の学びをつなげる言葉かけや子どもとの関わり方についての情報を共有する

「生活や学びの土台となる力」を育てる上では、生活をともにする大人の関わりが大きな役割を果たします。特別なことではなく、日々の何気ないコミュニケーションが、子どもの自尊心や安心感を育てる基礎になります。例えば、子どもが家庭で学校の出来事を話したとき、まずは「そうだったんだね」「それはうれしかったね（つらかったね）」などと気持ちを受け止めることが大切です。成績や表面的な出来栄だけを見るのではなく、努力や成長の過程を認めて伝えたり、失敗したときなどに、「一緒に考えてみよう」と寄り添ったりすることで、「自分は大切にされている」「挑戦しても大丈夫」という気持ちになります。失敗も含めた子どもの経験や思いを、教師や保護者、地域の大人が、「なるほど」「がんばったね」などと受け止めることで、安心して話ができる風土が生まれます。そして、「自分も役に立てるかもしれない」「自分の考えを言ってみよう」と考えることができるようになり、生活や学びの土台へとつながります。

(3) 達成状況の分析について

「生活や学びの土台となる力を育てる」の達成状況については、成果指標（アウトカム）から分析します。

【成果指標（市質問調査による分析）】

生活や学びの土台となる力には、基本的な生活習慣の確立、基本的な対人関係づくり、学習意欲などが含まれます。子どもに「生活や学びの土台となる力」が身に付いているかを把握するためには、市質問調査における次の設問によって測ります。

調査対象は小学校2～5年生と中学校1～2年生です。本市全体の達成状況を分析する際には、小学校5年生と中学校1年生の結果を用います。

授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができると思いますか。

また、基準値は、令和6年度（※）の全国調査において、令和6年度小学校6年生と中学校3年生に対する同様の質問「授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりすることができると思いますか。」の肯定回答率とし、毎年基準値を上回ることを目標値としています。

	基準値	目標値
小学校5年生	質問の肯定回答率 79.9%	毎年基準値を上回る
中学校2年生	質問の肯定回答率 78.4%	毎年基準値を上回る

各校においては、同一集団の経年変化に注目したり、同様の質問を年度末に行って意識の変容を独自で調査したりするなど、生活や学びの土台となる力を育っているかどうか、継続的に調査分析を行います。

（※）「目標4」のみ令和6年度の数値を用いているのは、この質問が設けられて以降、最も高かった肯定回答率であるためです。

なお、「生活や学びの土台となる力」については、「粘り強く学ぶ力」と同様に、教科における調査結果を活動指標とすることは適切ではありません。そのため、市質問調査の結果に、学級で見られる児童生徒の姿、家庭や地域で見られる子どもの姿を重ね合わせ、子どもの状況を多面的・多角的に捉えて分析します。



第3章

よこすか豊かな学びづくり推進プランと主な関連事業等

本プランで掲げた4つの目標を達成するためには、これまで述べてきたとおり、学校・家庭・地域が三位一体となって児童生徒の成長に向き合うことが大切です。

横須賀市では、児童生徒の学びを豊かにするために、様々な事業に取り組んでいますが、それぞれの事業の目的を学校・家庭・地域で共有することは、児童生徒の成長に寄り添うために必要です。

そこで本章では、この4つの目標を達成するための関連事業等について紹介します。

下の図は、教育委員会で行っている事業等と、本プランとの関連性をイメージしたものです。各事業等の充実が「豊かな学び」につながることを意識して、児童生徒と向き合っていただきたいと思います。

【豊かな学びづくりと教育委員会（教育指導課）の事業等との関連】



以下は、教育指導課が実施する事業等を中心に紹介しています。

1 教育課程研究推進事業

学習指導要領では、育成すべき児童生徒の資質・能力を明確にし、それぞれの学校の特色を生かした教育課程を編成することが求められています。

この教育課程に関する研究の推進を図るため、市立小中学校を対象に、輪番で教育課程研究推進校を指定し、職員間で目指す児童生徒の具体的な姿を共有し、学校全体で豊かな学びづくりに取り組むなど、学校研究の質の向上および教員の指導力向上を進めていきます。

また、各推進校の取り組みを市内に周知することで、小中学校教育のさらなる改善および充実を目指します。

2 学校研究および教科等研究会に対する支援

学校および教科等研究会の主体的な研究を助成し、研究を通じて、教員一人一人の資質や指導力の向上を目指します。

3 教科等指導員の委嘱

高い専門性を備えた教員に指導員を委嘱し、公開授業の取り組み等を通して、横須賀市の小中学校における教科等指導の改善と、教育水準の向上を目指します。

4 小中学校教科等研究に関する日（YOKOSUKA 研究日）

教職員の働き方改革における「教員でなければできないことに集中できる環境の実現」と、学力向上推進の一環としての「児童生徒の資質・能力を育成するための主体的・対話的で深い学びの授業実践の充実」を図るため、市立小中学校の全教員が一斉に教科等の研究活動に専念できる時間を設け、教員の勤務環境を整備するとともに、授業力等の向上を目指します。

5 情報活用能力の育成

情報技術を自在に活用し、より深化した課題解決に向けた探究的な学びができるようにしながら、デジタルの負の側面にも対応できるよう、情報活用能力の向上を目的とした研究を進め、その成果を通じて日々の学校教育活動における個別最適な学び、協働的な学びの質を高めます。

6 小学校授業アドバイザーの配置

経験年数の少ない教員が多く在籍する小学校を対象に「小学校授業アドバイザー」を配置し、教員の授業づくりや学級経営における指導力の向上を支援します。

7 学習支援員の配置

全ての児童生徒が主体的に授業に参加できるよう、「学習支援員」を配置し、教職員と連携しながら、学習状況に課題の見られる児童生徒を対象とした個別の学習支援や少人数での補習等の学習支援を行います。学習支援員は、学級担任、教科担任等教職員と十分に情報交換した上で授業の補習、家庭学習等の支援・指導等、対象児童生徒の習熟度に合わせた指導を行います。

8 芸術鑑賞会の開催

横須賀芸術劇場・横須賀美術館で、優れた演奏や美術作品などの「本物の芸術」を体全体で鑑賞する機会を設け、児童の豊かな心を育成します。

- ・オーケストラ鑑賞会（対象：小学校第5学年）
- ・美術鑑賞会（対象：小学校第6学年）

9 児童生徒指導に関わる行事の充実

児童生徒の作品や研究などを発表する場を充実させることによって、児童生徒一人一人の学習意欲、創作意欲等を向上させます。

- ・児童生徒造形作品展の開催
- ・よこすか子ども科学賞・よこすか子ども発明展の開催
- ・中学校演劇発表会の開催 など

10 子どものための音楽会の開催

文化活動への関心や意欲の向上を図るため、横須賀芸術劇場において吹奏楽部の合同バンドによる「合唱と管弦楽のための組曲『横須賀』」の演奏や、小中学生による作詞・作曲作品の演奏を聴く機会を設けます。

11 リーダースキャンプ（中学校連合生徒会役員研修会）の開催

学校生活をより豊かにしていくために必要な力の育成を目的として、市立中学校 23 校の生徒会役員の交流を通して、さまざまな課題や解決策を具体的に話し合うことで、リーダーとしての自覚を高め、自校の取組に還元します。

12 横須賀総合高校におけるキャリア教育の推進

生徒一人一人が自分の目標を見つけ、主体的に進路を選べるよう、キャリア教育の充実を図ります。

全日制では「産業社会と人間」および「羅針」（総合的な探究の時間）の授業において、関東学院大学の教授等の専門家の視点を取り入れた指導を行い、探究的な学びを深めるとともに生徒のキャリア意識の醸成を目指します。

定時制では市内企業による説明会の開催やインターンシップなどを通じて、生徒のキャリア意識の醸成を図ります。

13 道徳教育に関する指導力の向上

道徳教育に関する教員の指導力を向上させるために、教職員が道徳教育の指導上の諸問題を研究協議するとともに、道徳教育全般や道徳科についての研修等の充実を図ります。

14 学校を核とした読書活動の推進

子どもたちの成長段階に応じた、さまざまな教育活動を通じて、学校図書館の活用を中心に、読書活動の推進に取り組みます。主に、学校図書館の機能充実や、学校図書館を利活用した授業事例の共有を進めます。

また、学校図書館の運営や利活用方法に関する研修の充実を図るとともに、市立図書館との連携として、電子図書館における選書や学校配送便、職場体験の受け入れ等、学校教育での市立図書館の活用を図ります。

15 国際コミュニケーション能力育成事業

小・中・高の12年間で、児童生徒の国際コミュニケーション能力の向上および国際教育の充実を図ります。

- ・全市立学校へのALT（外国語指導助手）の派遣
- ・AI英語学習アプリの活用
- ・YOKOSUKA English Worldの開催

16 幼保小の架け橋プログラムの推進

子どもの育ちや学びの連続性を重視した教育を展開するため、幼稚園・保育園・認定こども園と小学校との合同研修会の開催やカリキュラムの作成、学校給食などを通じた就学前の幼児と小学生の交流体験を行い、就学前教育と小学校教育の円滑な連携を図ります。

17 学校運営協議会の活動の推進

学校運営協議会の活性化を一層進めていくため、地域との窓口となる地域学校協働活動推進委員（コーディネーター）を委嘱し、学校運営協議会委員としても役割を担う仕組みをつくることで、学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的推進を図ります。

18 小中学校におけるキャリア教育の推進

児童生徒一人一人に、望ましい職業観・勤労観および職業に関する知識や技能を身に付けさせ、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育成する「キャリア教育」を、学校、地域、学校間で連携して推進します。

- ・横須賀商工会議所と連携した体験型教育支援プログラムや職場体験の実施
- ・キャリア・パスポートの活用

19 部活動地域展開モデル事業

部活動の地域展開を見据えたモデル事業を実施し、学校と地域指導者の連携体制の構築を図ります。

20 防災教育の推進

各学校の立地や地域特性を考慮し、防災・防犯対策を強化するため、外部専門機関からの助言を受けて、危機管理マニュアル（防災・防犯マニュアル）の作成・見直しや実践的な防災教育の充実、学校・家庭・地域が連携した学校防災に係る活動の推進を図り、防災を含む安全に関する教育の充実を図ります。

21 チャレンジアップの支援

高い目標を持ち、意欲的・主体的に学習に取り組むことを目的に、中学校の学習内容にとどまらない、一歩進んだ学習内容へのチャレンジを支援します。具体的には、市内在住・在学の中学生に対する各種検定試験（漢字検定・数学検定・英語検定の準2級以上）検定料の助成をします。



**あなたが好き 私が好き 横須賀が好き
と誇れる人づくり**

**横 須 賀 市 学 力 向 上 推 進 プ ラ ン
(よこすか豊かな学びづくり推進プラン)**

令和 8 年度 (2026 年度) ~ 令和 11 年度 (2029 年度)

策定年月 令和 8 年 (2026 年) 3 月

策 定 横須賀市教育委員会

(担当 教育委員会事務局学校教育部教育指導課)

〒238-8550 横須賀市小川町 11 番地

TEL : 046-822-8479 FAX : 046-822-6849

E-mail : gu-bes@city.yokosuka.kanagawa.jp